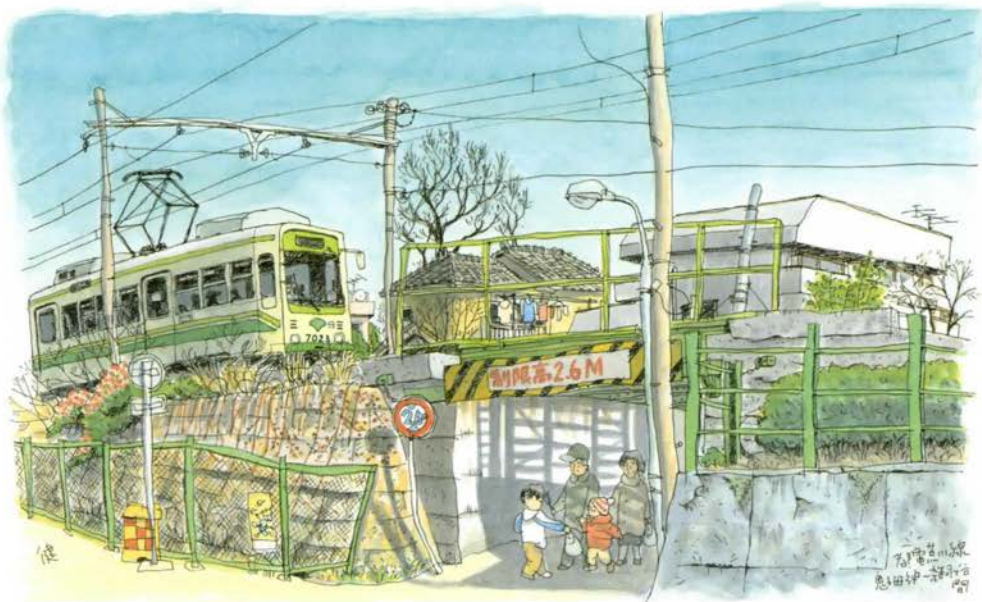


浄土

monthly
JŌDO

2012 **12** December



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

都営荒川線 雑司ヶ谷駅 停留所付近

都電荒川線は、むかし王子電気軌道という会社によって敷設された路線です。それを東京市（現東京都）が買収。この経緯から、古い利用客は、いまだに「王子電車」（略称：「王電」）と呼びます。かつては23区内を縦横に走っていた都電も次々に廃止。たつたひとつ残ったのが、この荒川線です。

雑司ヶ谷駅は、近くに雑司ヶ谷霊園、雑司ヶ谷鬼子母神、旧雑司ヶ谷宣教師館などがあり、風情豊かな環境にあります。池袋に抜ける商店街（東通り）には、大型書店のジュンク堂があり、予備校や専門学校の生徒で賑わっています。

12月

浄土

2012/12月号 目次

法然上人と平家の人々③	講演＝石丸晶子	2
会いたい人 串田和美さん①	関 容子	12
響流十方	袖山榮輝	22
連載小説 渡辺海旭	前田和男	26
江戸を歩く第48回	森 清鑑	34
Jフォーラム		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人
讃仰会
講演概録

平成二十四年六月二十二日 於増上寺慈雲閣

法然上人と 平家の人々

第三回

東京経済大学名誉教授

石丸晶子

そしてまた、やがて壇ノ浦で平家は滅亡して、源氏の勝利になって、源氏たちは一人一人の侍がたくさん敵の人を殺して、血にまみれ土にまみれた姿で都に戻り、そしてまた関東の自分のふるさとに戻っていくわけです、ふるさとに戻っていけば戻っていくで、また、「おれたち、すごいあれ見たよ」「平家がこうだった、ああだった」「戦場ではおれは何人、人を殺した」、いろいろなうわさで、日本中と言っていいほど、その平家滅亡のうわさで持ちきりだったのでしょう。

そういう状況の中で、式子内親王の歌に戻りますと、海の上で女たちは琵琶を弾いたというのです。戦場の軍船の中で女たちは琵琶を弾いた。

その哀れさに、その話を伝え聞いただけで、心はもちろん泣いたけれども、袖さえも涙で濡れてしまった。

「伝へ聞く袖さへぬれぬ浪の上夜深く澄みし四つの緒の声」

関東でも関西でも大変な騒ぎで、都ではもちろん平家の縁者、平家と縁組をしている貴族たちはたくさんいました。

皇室にもたくさん平家の人たちが入っていて、何しろ高倉天皇の子供たちは皆、平家の血筋でしょう。高倉天皇のお母さんが平家の建春門院滋子ですから。安徳天皇のほかにも高倉天皇に子供がいました、ほかのお妃様との間です。

そうすると、平家に目をかけてもらいたいと人々が皆願った、その一族が壇ノ浦で滅亡したというので、もうどこでもかしこでも、都では特に大騒ぎになりました。

史料を見ますと、公家たちは一族滅亡という前代未聞の世紀の大悲劇を、同時代人として生きて、「こんなことを見た」「あんなことを見た」「ああだったそうだ」「こうだったそ

うだ」「ああいう話だ」「こういう話だ」と言ってメモを取って、それをお互いに交換し合
って、自分のメモにつけ足したり何かした。

お寺では、お坊様が、それまではお経の内容についてお説教していたのだけれども、生
者必滅、会者定離、その例えはるか昔の二千年前、インドのお話としてではなくて、現
実に今ここで、日本の壇ノ浦で、あるいは都で起こった、一ノ谷で起こったこととしてお
説教された。この世の栄華というのはかないということをお話しなされた。その材料に
なされた。

お坊様たちも、お説教の材料を仕入れないと困ってしまうわけでしょう。こんな話があ
ったそうだと、あんな話があったそうだと。だから、都中が当時、もう一体どうなるのかとい
うことだったでしょう。

それで、歴史の、その時代の動きそのままの状態で、いろいろな話が動いていった。都
中の人々、寺院中の人々、そして、それは皆比叡山に集まっていたと思います。比叡山
というのはその当時、一大権力寺院でした。お寺というのは、やはり人々、知識人が集ま
る一つの大きな基盤でしょう。そういうお公家さんたちが集めたいろいろな資料がお寺に
持ちこまれ、または比叡山が命令して集める。それは関東の諸寺院からも来る。熊谷次郎
直実のお話なんかも、こうして関東のお寺から比叡山に集められたのかもしれない。

そして、膨大な資料が、メモ的な資料も集まったでしょう。ほとんどそういうものがそ
のまま整理整頓されずにつくられたのが、長門本の『平家物語』とか、延慶本の『平家物
語』というもののなのです。それを読み本系といいます。

そして普通私たちが『平家物語』と言っているのは語り本系平家です。非常に洗練され

た文章になって、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし」という、あの非常に整った『平家物語』の言葉があります。

最初はメモ的なもの、それをそのまま編集せずに集めたものが長門本の『平家物語』であり、延慶本『平家物語』である。だから、そこを今度はきれいな言葉に入れかえ、順序を入れかえたり、わかりやすい言葉で書き直したり何かしたのが、流布本という、今私たちが普通目にする『平家物語』なのです。

それが琵琶法師によって語られて、全国津々浦々に広がっていったのが、あの平家物語のシナリオなのです。

そして、その『平家物語』をつくったのが、比叡山にあつて、資料をまとめてきれいな流麗な文章にしたのが、下野前司行長であつたというわけです。その行長という人は信空の弟です。

そうすると、この行長という人と、それから時長という人、信空のいとこですが、この時長と行長という人は領子がおばさんです。信空と同じく、母親違いのお父さんのきょうだいですから、おばさんに当たるのです。

それで、この領子という人は壇ノ浦まで平家と行を共にしています。だから、壇ノ浦の最後、安徳天皇が入水する、そのところまで、『平家物語』にもちゃんと書いてある。領子は見ているのです。

平家の目撃者であり、もう世紀の一大悲劇の最後の最後に至るまでの目撃者であつた領子、平家が富み榮えていたときから壇ノ浦で滅亡するまで、その後、建礼門院が出家して

寂光院に赴くまで、すべてを見てきた領子という人は、この人たちのおばさんですから、直接おばさんからいろいろなことを聞いたに違いない。だから、この断片的な『平家物語』をまとめて今日私たちが見る『平家物語』にするには行長は最適の立場にいた人なのです。

そうすると、どうして行長が『平家物語』の作者であったか。『平家物語』の作者は一人ではない。時代全体が一つ一つの目撃者であり、作者であり、それをわかりやすくまとめたのが行長とか時長とか顕耀とかという人たちであった。こういうことになります。

そして、それを盲目の琵琶法師に語らせ、特に、お寺でお坊様のお説教の材料にして、今、御詠歌があるように、お坊様たちが言葉で話す。そのあとで、この琵琶法師たちがベンベンと鳴らしながら、生者必滅、会者定離、盛者必衰の理^{ことわり}というものを、琵琶を語りながら語って聞かせたわけなのです。

それから、一言、言い忘れたのですが、『平家物語』と琵琶法師がどうして結びついたかという点、平家が滅亡する以前は、琵琶法師の仕事というのはむしろ三河万歳のように、琵琶を持っておめでたいことを話すことだったのです。

そして、半年間はお寺でいろいろお説教の御詠歌のようにベンベンと鳴らし、あと半年間は諸国を放浪して、貴族とかお金持ちそんな家の門前に行って、三河万歳のようなことをやってお賽銭をもらって、そしてまた半年たつと、また自分たちの所属するお寺に帰っていく。そしてお寺にご奉仕する。そういう生活形態だった。

そのところに平家の滅亡ということが起こります。それで『平家物語』ができ上がっていきます。だから琵琶法師の最も大きなテーマは、三河万歳のようなものではなくて、平家物語、平家の栄華と没落の歴史に変わっていくわけなのです。

そういった、もともと琵琶法師の生活形態の、半年はお寺に所属し、半年は諸国に流浪して物語るということでしたから、諸国に流浪して『平家物語』を語り聞かせ、そして人々に、何てかわいそうな、苦しかったろう、気の毒だったというような、その思いというのを諸国にまき散らしていったのです。

琵琶法師たちが津々浦々を回って、その平家滅亡の歴史を語るわけでしょう。そうすると、字も読めない人たちでも、話で聞けば理解できる。他者の苦しみに対する想像力が養われます。こんなことをしたら他者がどんなに苦しむか、痛むかという、そのいたわりの心というのが養われるわけです。

だから、『平家物語』が日本人の、名もない、貧しい、民百姓と言われる一般庶民、一切衆生の精神生活をどれほど豊かにしたかということは、はかり知れないものがあると思います。

『源氏物語』は貴族の物語ですから、字が読めないと、そして貴族あるいは庄屋さんとか、レベルの高い、お金持ちの人たちでないと、『源氏物語』に接することはできませんでした。

けれども、『平家物語』は琵琶法師の語りを通して、日本中にどれほど共感の深さ、共感のつながりというのを培っていったか。今「ともいき」ということがしきりに言われます。どんなにつらかったろう、かわいそうにという、そのともいきの心、いたわりの心を培う上で、平家はどれほど大きな役割を果たしたかわからない。

きょうのテーマは法然上人と平家の人々ですから申しますと、十二卷プラス灌頂巻が『平家物語』の構成です。その灌頂巻を見ますと、後白河法皇が、平家が滅亡した一年後、

大原の寂光院に隠棲している平徳子、建礼門院を訪ねていくところがあります。

建礼門院の庵室に何があったかというところ、善導大師の著書「五部九卷」と、善導大師の画像と阿弥陀三尊像が置かれていたと書かれています。

これをみますと、善導大師の五部九卷の全著作と、善導大師の画像は、とりもなおさず、建礼門院が法然上人のみ教えに帰依していたことを示してはいないでしょうか。

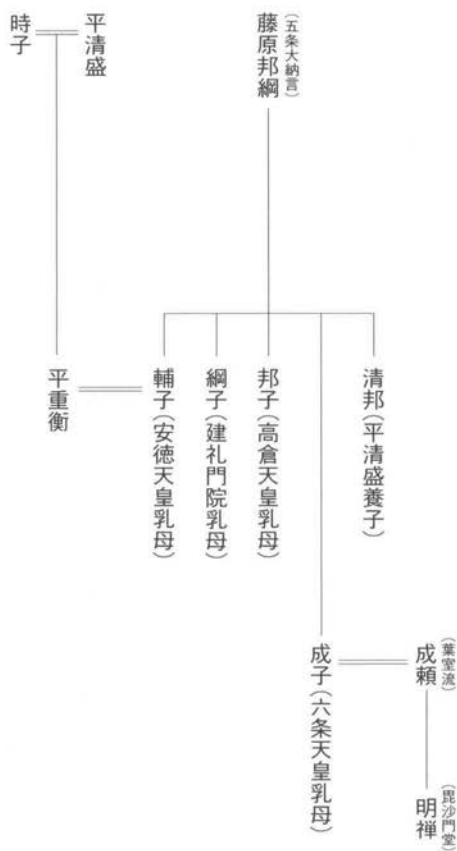
そう考えることが私は非常に自然だと思えますし、どうして建礼門院が法然上人のみ教えに接することができたかということは、今申し上げましたように、法然上人、信空上人、そして領子、皇室の人々、平家の人々となつていくことからわかると思います。

なお、だれを取り上げてもいいのですが、もう一つ、『平家物語』を読むときに非常に心打たれるところは、死ぬときに平家の人々が一団となつて船から海に身を投げていくことです。そのとき多くの人々が、二十人、三十人と、侍たちは輪になつて海に身を投じていきます。一人でドブン、ドブンと沈まないのです。

平家の公達たちは、絶対もう浮かび上がらないように、鎧を二領着込み、あるいは、鎧を持って、その乳母子と一緒に沈んでいきます。

一旦海に沈んだけれども、やはり生存意欲が湧いてきて、海から浮き上がったしたら、恥をかくし、武士としての誇りを傷つけられるわけで、沈んだらもう二度と浮かび上がらないように、鎧を持つているすさまじい姿が『平家物語絵巻』には描かれているでしょう。そして、乳母子と一緒に沈んだ。あるいは、いとこ同士が三人抱き合つて沈んだ。

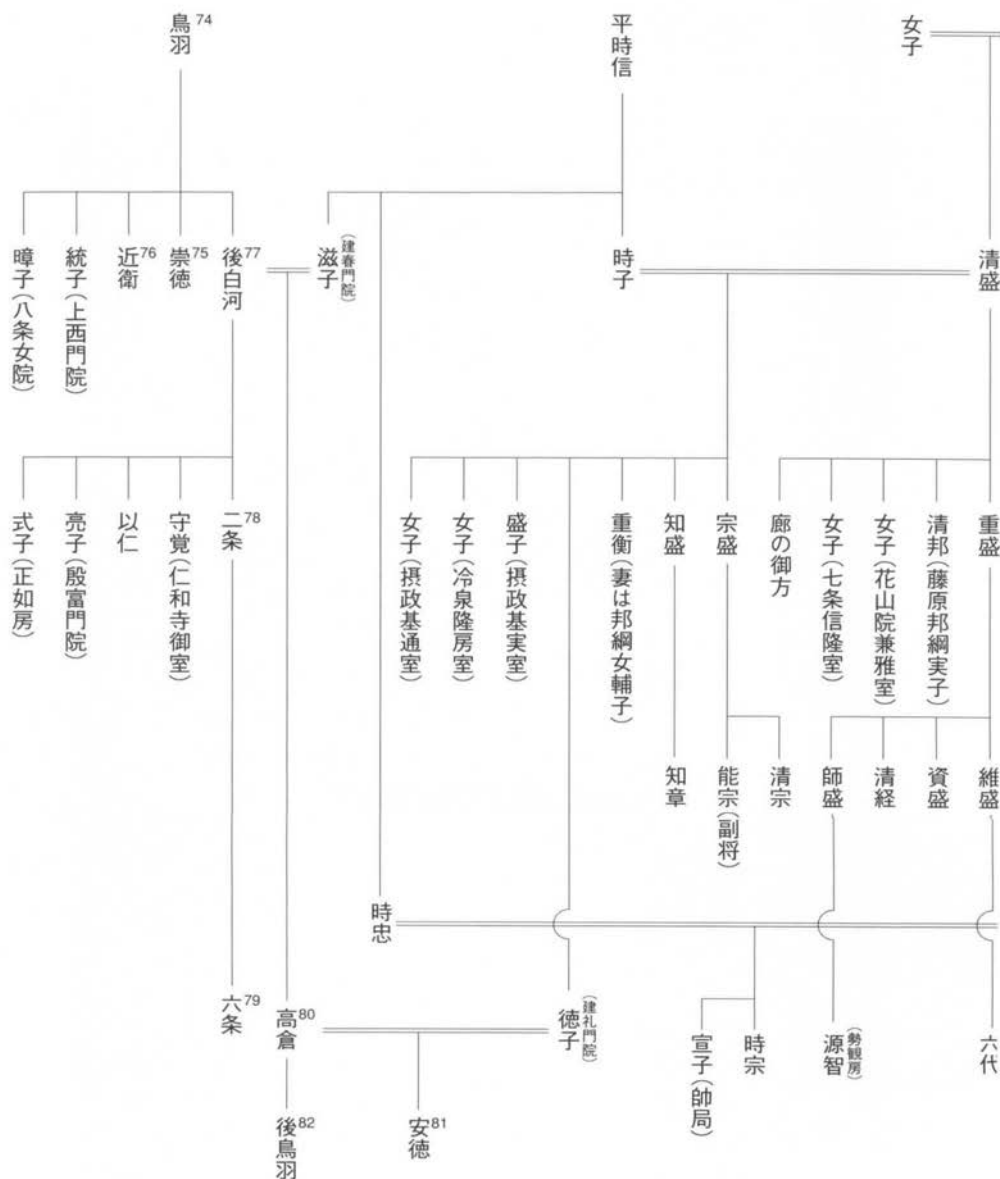
皆複数で、お互いがお互い呼び求め合つて、一人で寂しくボトンとは死なないのです。やはり人間というのは他者を必要とし、他者の愛情の中で死んでいくことを求める存在だ



ということを、『平家物語』を読むときに、私は痛切に感じさせられています。

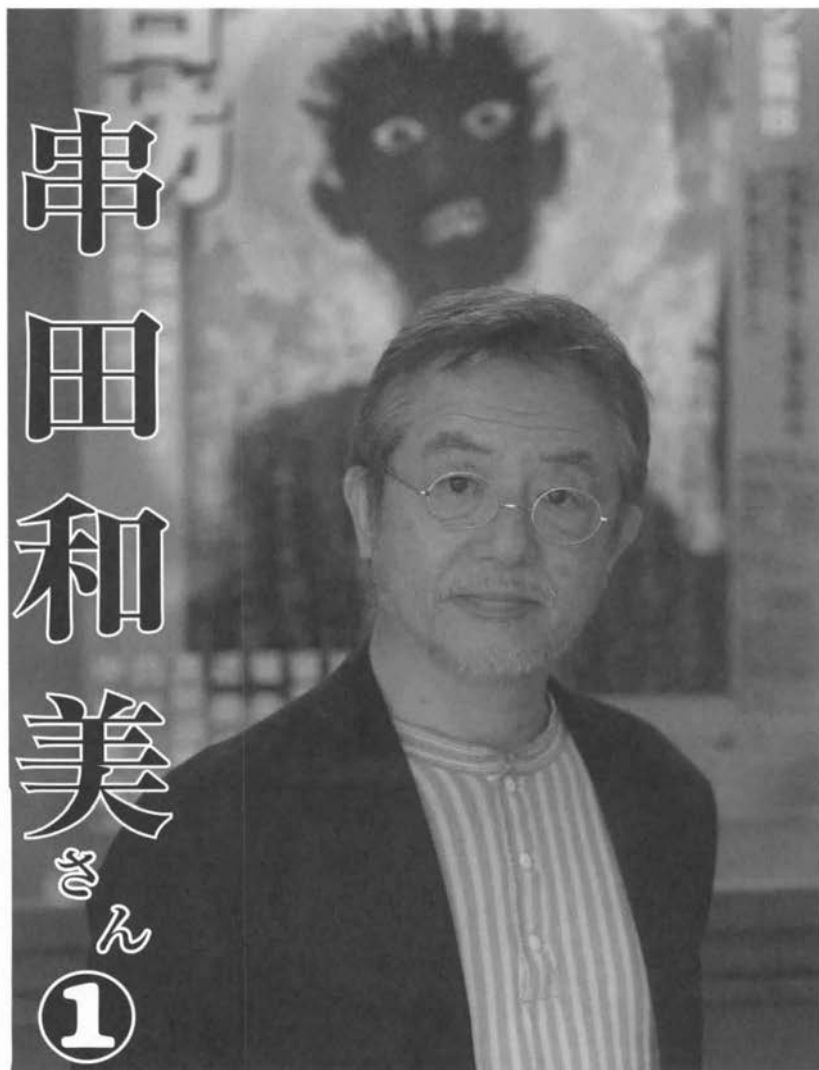
(了)

平家の人々



連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

六本木のガラス店の薄暗い階段を地下に降りて行くと、そこは文字通りのアンダー・グラウンド。若者たちの熱気でそこら中に七色の夢が立ち昇り渦巻いているような小さな空間があつて、まさにそれが「自由劇場」の名にふさわしい不思議な場所だった。私の通いなれている歌舞伎座の広々として明るいロビーや客席の雰囲気とは大違いの、あの狭苦しい客席に身を置くだけでワクワクした。

このアンダーグラウンドシアター自由劇場のリーダーである串田和美は、当時の演劇青年や若いお客たちのまさに憧れの的だった。

今、改めて考えてみると、私が串田さんを身近に感じ出したのは、折にふれて勘三郎（そのころは勘九郎）さんが熱く語ったさまざまなエピソードによるものらしい。

串田さんが渋谷文化村シアターコクーンのアート監督に就任して五年目の平成七年五月、第一回コクーン歌舞伎『東海道四谷怪談』の

ときのこと。

「お岩さまの髪梳きの場ね、あれは広い舞台でたった一人でしょ。歌舞伎の舞台稽古のときなんて客席で誰も見てないんだよ。ところがコクーンの場合は、監督がじつと真剣に僕を見てくれる。なんだか張り合いがあつて嬉しかった」

第三回目の『盟三五大切』のとき。

「誰が考えても僕が船頭の三五郎で橋之助が源五兵衛実是不破数右衛門だと思ふでしょ。でも監督の役の説明が、三五郎はイタリア人で源五兵衛はロシア人だつて言うの。三五郎はそつつかしくて単純だけど、源五兵衛は重苦しくて過激でしょ。それ聞いたら俺両方ともやりたくなつちやつて。だから橋之助と一日交替にした。だけど演出家つて、へんなこと考えるもんだね、すごいと思うよ俺」

また平成十二年、浅草に初めて平成中村座が仮設開場したが、その公演中の楽屋には、いかにも手作りらしいちよつと汚らしい坊

さんの人形がずっと飾ってあった。

「これ？ 串田監督が作ってくれた『法界坊』。親父（十七代目勘三郎）が大当りさせた役に今回僕が挑むに当って、その通りにやるんでは乗りこえられない、というジレンマがあった。そしたらこんなイメージで演じたら？ って人形で伝えてくれたんだね。眼はボタンだし、口はチャックだし、こわれた感じで面白いでしょ。口であれこれ言うよりも、ひと目でわかる。ユニークな演出家だと思つてさ、俺、尊敬しちゃう」

勘三郎さんにとつて串田和美は、それまでまったく出会ったことのないタイプの兄貴分として、眩しい存在なのだろう。

串田さんは昭和十七年八月六日、東京に生まれた。父は詩人で哲学者で名随筆家の串田孫一、祖父は三菱銀行会長もつとめた財界人の串田萬蔵。由緒正しいインテリ家庭で育つた。

串田さんが照れながら言う。

「別にインテリとか思ったことないけどね、家柄だけ見るとそうなるのかな。とにかくうちには床が抜けるほど本がいっぱいあって、友だちがうちには本なんてなかった、と言ったりすると、へえ、と思うけど、ほかを知らないからね。僕が生まれたところは……聖路加（笑）。でも、うちはそのころお茶の水かな。それから巣鴨に引越して、疎開して、山形県の新庄のかなり上のほうにある荒小屋（あらかや）というところへ。三歳の誕生日に広島に原爆が落ちて、一週間目に終戦だった。しかしすぐ帰るわけにはいかないんで、しばらくそこにいたときに観た村芝居の印象がとても強烈で、それが僕の原因風景と言えるかな。たぶん、その土地の地歌舞伎のようなものだと思う」

そう言えば終戦後は食糧難のせいで歌舞伎もよく地方巡業の旅に出た。私は疎開先の長野県松代の松代劇場で観た『釣女（つりめづめ）』の醜女のおかしさが強く印象に残っていて、両親から

教わった「上から読んでも下から読んでも助高屋高助」というその役者の名が今も忘れられない。

「僕は親じゃなくて、近所のお百姓さんに連れてかれたんで、演し物も誰が来たのかもよくわからない。それも劇場じゃなくて筵掛けの小屋に、裸電球がボンボンとぶらさがって、それが眩しくって。細かいことはほとんど覚えていないけど、多分、歌舞伎の『だんまり』のようなもので、その印象が鮮烈だった」

この幼時体験がずつとのちのククーン歌舞伎で、劇場を小屋掛け芝居のようにしてしまふ斬新な演出につながって行くのだろう。

疎開から戻ると、一家は井の頭公園に程近い、昔は牟礼、今の井の頭に住んだ。小学校から高校まで、近くの成蹊学園に通う。

「うちは山小屋ふうではあるけど畳のない西洋館で、相変らず本だらけだった。ときどき亀井勝一郎さん、草野心平さん、尾崎喜八さ

んとか、絵描きさんとかの集りがうちであって、自作を読み上げたり、このごろ楽器やってます、なんて言っていきなりフルート吹き出したりして。僕なんかその音色よりも拍子取るスリッパのベタベタいう音のほうが印象的だったけど。戦後すぐだから何かと自由な時代で、ある絵描きさんが、うちに風呂作りましたから入りに来てください、って言わんで、父と一人でトコトコ訪ねて行ったら、庭にドラム缶がボンと置いてあって、そして、あ、そこに入ってくださいあい、って。庭で素裸になって入ったら、ドラム缶の底に何かグニャツとするものがあつた。あ、それ洗濯物ですからよく踏んでくださいあい、なんて(笑)。のどかな幼年期でしたね」

そのうち、串田さんは一歳下の弟さんを誘って、絵を描きにそこへ通うようになる。「そしたら大人の生徒がいっぱいいる中に女の子の人が裸で寝そべっていて、あ、和ちゃんた



自由劇場時代の串田さん。30数年前の頃（撮影／タカオカ邦彦）

ちは子供だからこつちを描きなさい、なんて果物が用意してあるんだけど、でもすぐ横にいるわけだから、気になるよね。先生が、いいオッパイだね！ ってさわったりすると、おお！ と思つて、なんだか大人の仲間に入つたような気分になるんだけど、でもそのうち近所の可愛らしい姉妹が来るようになって、そのすぐそばに大人の女の人がある、なんかとても恥しくなつて、それでじきに行かなくなつちやつた」

しかしその弟さんの串田光弘氏は、美術の道に進み、現在グラフィックデザイナー。

「彼も最初は描いてたけど、今はオートデイレクターの仕事が主ですね。ものすごく絵がうまくて、ああ俺、弟がこんなにうまくちゃ絵描きになれないや、つて思つた。彼は三ミリ間隔、三ミリ間隔の線をフリーハンドで正確に引けちゃう。でも、ルオーみたいに何度引いても違う、違う、つていう不器用な人ではないと絵描きにはなれない、と十代のときに

僕に話していたね」

ここから突然俳優論になる。

「大女優の田中絹代さんはとても不器用な人で、たとえば出刃包丁でバツと切りつける、なんていうところを何十回もNG出して、そのかわりに到達したら一ぺんですぐできた人とは全然違う名演技だった。だから一回でできちゃうと、あ、できる、と思つてもう稽古しないのが普通なんだけど、その点、勘三郎さんは器用ですぐできる人なのに、あ、できる、で終らない人。不器用コンプレックスは誰にもあるんだけど、彼は器用であることにコンプレックスを持っていて、ものすごく稽古をするからね」

串田さんが中学に進学し、新入生歓迎会で初めて観せられたのは上級生が演じる民話劇の『瓜子姫とあまんじゃく』。しかしこれには変つた演出があつた。

「二年生の長山藍子さんが瓜子姫で、のちに

女優になるだけあって、きれいだなあと思つて見ていたら、僕たちの後ろの席でやたら文句をつける生徒がいて、そのうちそこに先生が出てきて、君が一番あまのじゃくだ、つて言うんだけど、その先生というのがなんだか子供みたいでへんだなあ、と思つてたらやっぱり上級生。後ろから叫んだのは三年生の山本圭さんだった（笑）。それで、『瓜子姫』という僕らがよく知ってる話の虚構をこわしたところから芝居が始まる……その面白さにこのとき僕はめざめたというか、芝居には演出というものがあることもわかったんだね」

串田さんはさつそく都民劇場の「新劇サークル」に入会し、俳優座、文学座、民藝などを一人で観て回った。

「一番記憶にあるのは安倍公房の『幽霊はここにいます』ですね。途中で歌い出したり、突然コーモリ傘さしたり、リアリズムからちよつと離れたところが面白いと思つた」

もちろん中学の演劇部にも入部する。

「部活の先生が国語の先生で、若いころ民藝にちよつといて俳優をめざしたこともあるという人。ある日、部室を訪ねて行ったらドーランの缶がそこに置いてあつて、青だの茶色だのいろんなのがあつたから、そつと手に取つて匂いをかいでたら、後ろから先生がヌツと入つて来て、その匂いをかいだらもうやめられないぞお、つて（笑）。悪魔みたいな顔して笑うから、ドキツとして、そうかあ、と思つたけど、その通りになりましたね」

最近の串田さんは悪魔づいている。サイトウ・キネン・フェスティバル『兵士の物語』（ストラヴィンスキー）でも、また自作の『K・ファウスト』でも悪魔の役で、私はその舞台を観たばかりなので、今の話も手に取るように実感できる。

「一方、中学生になると父と山登りをするようにもなつて、演劇とはまったく正反対の世界も見てる。あのころは、今みたいに山へ行つても人にいっぱい会うようなのと違って、

一日中誰にも会わなかったり、山小屋で二、三日まったく話す相手もいなかったりしたから、考えたことは総て自分の中にしまっておけばいいや、という世界。演劇は人を集めて発表して、手を叩いてもらうという世界。両方の中で育ったわけですよ。父は子供に何にも仕向けない人で、大人になった僕と早く対等に話がしたいと思ってたような人ですね。

母とは一度俳優座に『十二夜』（シェイクスピア）を観に行った記憶はあるけど、母はいつも本ばかり読んでてね。植物が好きでその研究書がヘブライ語だったら、ヘブライ語の辞書見ながら読んじゃう。ヘブライ語ですよ（笑）。頭がいいんだね」

その母上はまだお元気でもうすぐ九十一歳になられる。

「僕が浅草の平成中村座で芝居するようになったら、うちのお寺も浅草なんで、母が言うには、この先のところに六代目菊五郎が校長先生だった俳優学校があつて、六代目にその

場所をゆずったのがうちの母方の祖父、伊勢の大宮司だったのよ、つて言ってた。そして、父方の祖父の萬藏は初代吉右衛門が最顶层で仲がよかったそうで、うちに吉右衛門の『石切梶原』の大きな絵があつたりして、お互いの孫同士、つまり今の幸四郎さんと僕とは一週間違いの、ほとんど同時に生まれたようなものなんですよ」

そして、取つて置きの「秘話」が披露される。

「コクーン歌舞伎を演出するようになったら、歌舞伎を若者にアピールさせてくれたことにお礼が言いたい、つて、前の松竹永山会長に呼ばれてね。礼を言うのに呼びつけられた上に待たされて（笑）、待合室で退屈したら松竹の人が相手をしてくれて、串田さんのお父さんと幸四郎・吉右衛門（二代目）兄弟のお母さん（初代吉右衛門の長女で白鸚夫人）とは、結婚話があつたんですつてね、つて。えーっ!! つて、まったく聞いたことがなか

自由劇場、「シンペリウス」での串田さん（撮影／タカオカ邦彦）



つたんで、うちへ帰ってすぐ父に電話したら、なんか照れくさそうにあいまいな返事。でも祖父同士の親しい間柄であり得る話だからね。それで松たか子ちゃんが高校生くらいのとき、君のお祖母ちゃんとうちの父がもし結婚したら、僕たちも君のお父さんの幸四郎さんもいなかったね、って言ったら涙浮かべて、でもでも、祖父と祖母はすごく愛し合ってたから、って、真面目なんだね（笑）。その話も幸四郎さんにして、笑ったことがある」

こうして伺って行くと、串田さんとコク

ン歌舞伎の演出とが、ごく自然な結びつきなのがわかる。たとえば串田孫一氏と演劇評論家の戸板康二氏とは暁星中学時代の同級だったとか。私はたしか戸板さんの著書の中で、孫一氏描くところの終戦間もないころの海老蔵（十一代目團十郎）の「助六」。その舞台稽古風景の巧みなスケッチを見た気がする。

「そう、梅幸（七代目）さんとも暁星で同級だった。三人の写真がありますよ。僕は自由劇場時代に一時、戸板さんの考えてくれた芸名を、俳優で出るときだけ使ってたことがある。でも照れくさくなって、いつの間にかやめちゃったけど」

なるほど、自由劇場上演記録を見ると、昭和五十一年十一月、六本木自由劇場『お化粧銀次』（作・家高勝）で「串田和美改め藤川延也」の名披露目までしているが、十年後にはまた元に戻っている。名付親には悪いけれ

ど、のつべり白塗りの二枚目ふうなのがそぐわなくてなんだかおかしい。

ところで、父上は一度も串田さんの舞台を観なかったのだろうか。

「一回だけ、『上海バンスキング』が銀座の博品館劇場に進出（昭和五十六年）したとき観に来ましたね。当時の雑誌のエッセイに、僕がわけがあつてよく知っている俳優がいまして……なんて、他人みたいな書き方してた（笑）。阿片を吸うシーンで、やめろー、って叫びたかった、とか、緊張して背中が痛くなった、とか、ろくなことは書いてなかったけどね」

父と息子は表向きにはそういうものだろう。でも、「わけがあつてよく」のあたり、弾んだ気分は隠せない。

（つづく）

『觀經』の下の方のごとき、もし人有つて、至心に常に阿弥陀仏
および二菩薩を念ずれば、觀音勢至、常に行人の与に勝友知識と
作つて随逐影護す。

(善導大師「觀念法門」)

『觀經』の結末に說かれているように、つね目ごろ、心の底から阿弥陀さまや觀
音・勢至の二菩薩におすがりしている人がいるならば、二菩薩はつね目ごろから、
そうする人のために仏道を歩む上でのかけがえのない友・先生となつて、びつた
りと寄り添つてくださる。

お年取りとおさみしおとし

その昔、日本人は正月一日にみんなで一斉に年を取るものだった。

江戸時代の俳人、小林一茶に「這へ笑へ二ツになるぞけさからは」という句がある。一茶の句文集『おらが春』によれば、文政二年の正月一日、前年五月に生まれた愛娘の前に雑煮の膳を据えたところを詠んだ。今の感覚ならまだゼ口歳だが、生まれて一歳、お正月元旦を迎えて二才。これが数え年の数え方だ。大晦日の晩に家族揃って「おご馳走」を食べることを、我が街、信州長野では「お年取り」という。みなが無事に年を取れるようお願いが込められているよう。

東京の寺で生まれ育った私は、お年取りのおご馳走のことなど知らなかった。昭和六十年、私は縁あって長野市の寺に弟子入りした。初めての大晦日の晩、東京の寺では初詣客を迎え入れる準備で慌ただしい時間帯なのに、こたつで食卓を囲み一献傾ける。こりゃ、極楽だと思った。だが、それは束の間だった。顔が赤らみ完全にリラックスモードに入ったところ、住職が思わぬことを言い出した。

「さてと、じゃあ、そろそろ出掛けるとするか。お前は隣の町会の○○さんち行ってくれ。お経は日常勤行でいいよ」

弟子入りしたとはいっても、まだ東京で学生をしていた。住職が何を言っ

いるのか、さっぱり分からなかった。じつは我が街、長野には「善光寺さんの鐘の聞こえる範囲」という言い方で括られるいくつかの習慣がある。そのなかの一つが大晦日の「おさみしおとし」である。

語源も起源も知らないが、大晦日のお年取りに合わせ、その年に亡くなったご縁のある方の家を訪ねて仏前でお参りをするのである。初盆のお参りに伺うのと同じような感覚だ。われわれ菩提寺もまた弔いがあった檀家を回るのだ。

それにしても困った。調子に乗って杯を重ねていた私は心臓をドクドクさせながら覚えたての短いお経で故人のご供養することになったのだ。赤ら顔がなお赤くなっていたことだろう。

それ以来、もう何回、おさみしおとしを勤めただろうか。平成になり、今でこそ、お昼過ぎに出掛けるようになったが、その間、見聞きしながら、お参りの前後に申し上げる口上がだんだんと身についてきた。

「おさみしいお年取りでございます。故人にお参りさせていただきます」

「本年はおさみしい年でございました。どうぞ、みなさまお大事に」

長野は年始回りが盛んな土地柄だ。親類縁者のもとを挨拶回りする。喪中の家には、正月ではなく大晦日にご挨拶することになる。しかし「おさみしおと

し」は単なるご挨拶のやりとりではない。

「お年取り」は、遺族にとつては大切な人を失った寂しさをあらためて感じる日であろう。そんな日に、亡き方とご縁のあった方が亡き方の在りし日を想い出してください。亡き方とご縁のあった方、遺族とご縁のある方が「今年はさぞやお辛いことだったでしょう」

「どうぞ、ご心労がお身体にでませんように」「来年は良い年でありますように」と遺族に心を寄せてくださる。「私たちはいつもみなさんを見守っていますよ、お互いさまですよ」と寄り添う気持ちをあらためて伝えてくださる。それが「おさみしおとし」なのである。

阿弥陀さまにおすがりし、観音・勢至の二菩薩におすがりすれば、菩薩さまはいつもピツタリと寄り添ってくださる、導いてくださるという。それも菩薩さまの仏道修行なのだろう。だとすれば「おさみしおとし」もまた私たち至らない者たちなりの仏道修行であるのだろうか。そんなことを考えているうち、今年もまたお年取りの日が近付いて来た。

「おさみしいお年取りでございます。故人にお参りさせていただきます」

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十七回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

「金色夜叉」が呼び寄せた今再びの奇縁



碧眼哲人伯爵との聖俗問答

渡辺海旭が清談の相手として大いに期待をしていた哲人伯爵だったのに、何ゆえに美姫揃いで知られる日本の料亭と愛憎通俗小説に関心を抱くのか。海旭はさっぱり合点がいかず、どう言葉を返したらいいのか窮した。そんな海旭の戸惑いを察したのか、当のハイシリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵のほうから援け舟を漕ぎ出してくれた。

「『黄金の鬼女』とかいう小説の粗筋を教えてくださいぬか」

『黄金の鬼女』とはもちろん尾崎紅葉の『金色夜叉』のことだ。学究一途の僚友・萩原雲来とは違って、世事全般についていい好奇の虫がうずいてしまう海旭は、通俗小説にも少なからぬ関心があった。

『金色夜叉』は明治三十年（一八九七）、「読売新聞」の元日版をもって鳴り物入りで始まった。当時、筆者の紅葉は三十二歳。すでに

東京帝大在学中から山田美妙らと文学結社「硯友社」を興し、『二人比丘尼 色懺悔』で評価をえるや、『伽羅枕』『多情多恨』など佳作を発表、今や幸田露伴とともに「紅露」と並び称される確固たる地位を明治文壇に築いていた。かたや渡辺海旭は二十五歳。二年前に浄土宗学本校全科を優等で卒業、浄土宗の機関誌「浄土教報」の主筆に抜擢されるいっぽうで、浄土宗内地留学生として比較宗教学を究めんとするいまだ「学僧の卵」であった。海旭は、年始の勤行を終えておもむろに「読売新聞」の元日版を広げ、小説の新連載の書き出しが目飛び込んできたときのことを思いだした。

「未だ宵ながら松立てる門は一様に鎖籠めて、真直ぐに長く東より西に横はれる大道は掃きたるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の軋は、あるいは忙かりし……」

文弱好み^{（一）}の海旭には、雅俗折衷の語り口は「悪くないな」と感じられたものの、話の展開は通俗がすぎていささか辟易^{（二）}を覚えぬでもなかった。それでも海旭は折に触れて連載に目を通し、留学中も、末妹のかめが送ってくる新聞雑誌の中に掲載紙を同梱させた。それほどまでに執着したのは、博文館の小僧時代のある奇縁^{（三）}があったからだ。しかし留学二年め、作者の紅葉が急逝、連載は半ばで打ち切られる。海旭は、これで『金色夜叉』との奇縁も終わったと思い、安堵と心残りをこもこも覚えたものだった。

ところがまたまた『金色夜叉』とは……と海旭は内心でつぶやいた。あのとき紅葉たちと博文館での出会いがなければ、自分はいまここにいないかもしれぬ……こうして碧眼哲人伯爵と出会えなかったかもしれぬ……と、奇縁がいまだ生きていることの不可思議を海旭は想った。

そこへ哲人伯爵の「さあ、どうした、粗筋を教えてくれぬか」の声に促されて海旭は回想へ深入りするのを踏みとどまった。そして、哲人伯爵はいつたい何のために『金色夜叉』を持ち出したのかの疑念は内奥に押しとどめて、まずは伯爵の再促に応えることにした。

「極東の島国の世俗の物語を、異邦の哲人に受け入れてもらえる自信は、さらさらありませんが」と海旭は前置きすると、日本最良^{（四）}とはいえ異国の人にもわかるように工夫をこらしながら、こんな具合に説明を試みた。

幼くして父を失った主人公の間貫一は、亡父を尊崇する男の援助を受け、日本の各界に指導者を輩出する最高学府の予備門に通っていた。いつしか育ての親の娘である宮と恋仲になり、養父も二人の仲を認めて帝大を出たら娘を娶^{（五）}らせて家を継がせようと考えていた。

ところが、ある夜会で娘・宮は銀行家の御

曹司に出会って心変わり、貫一との結婚を反故にしてその男に嫁いでしまう。裏切られた貫一は、日本有数の温泉保養地である熱海で宮を問い詰め、怒りにまかせて宮を蹴り飛ばすと、「今月今夜のこの月を僕の涙で曇らせてみせる……」の捨て台詞を吐き、復讐にもえて高利貸しになる。

一方の宮は、外出がちの夫に夫婦仲も冷め、失意のなかで貫一への愛を改めて想い、自らの所業を悔いる日々を送っていた。そんなある夜、貫一は宮が詫びながら喉を突いて断崖から投身自殺する夢を見る。傷心の旅にでた貫一は、旅先の宿で、心中を図ろうとする男女を助ける。聞くと、女には宮の夫から身請け話、つまり「妾」となる話を持ち掛けられていると知り、二人が抱える借金を肩代わりする決意を固めるのだった。

海旭はここまで話すと、「実は、二年前に作者が亡くなったため、この先どう展開する

かは作者のみぞ知る、ですが……」と説明して話し終えた。

紅葉館の美姫の手踊りに魅せられて

「うーむ」と哲人伯爵はうなると、つぶやくように言った。「因果応報の物語ともとれるが……」

「いや、未完なのでなんともいえないが、まともな仏教観からするとあまりにも安直かつ俗流にすぎますが」と海旭は返した。

「いかにも、貴兄のいうとおりだ。人は因果に対して、主体的に立ち向かわねばならぬ。これは人を人として成り立たせる根本原理であり、男女の仲においてもまたしかりだ。これは仏教の哲理と矛盾するものではない。むしろ和合するものだ」

ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯は仏教の優れた理解者であると姉崎正治とロイマン教授から高い評価を聞かされてい

たが、なるほど西欧人にありがちな一知半解な仏教理解ではなく、かなり造詣が深いようだった。これなら、「聖」を論じながら「俗」に通じ、あるいは「俗」を論じながら「聖」に通じることができそうだ。下世話な方向へ流れることを懸念していた海旭はひとまず安堵した。そして、安堵するほどに、哲人伯爵と出会った冒頭の疑念がまたぞろ頭をもたげた。何ゆえに美姫揃いで知られる日本の料亭と愛憎通俗小説に関心を抱くのか…。

と、海旭の胸中を察したかのように、哲人伯爵は「俗」へと論を転じた。「運命にただただ身をゆだねていたら、わが妻ミツコも女主人公のようになっていたかもしれぬ。ミツコはあえて困難な道を主体的に選びとった。私はそんなミツコを誇りに思い、だから深く愛しているのだ…」

いくら名門伯爵家嫡男からの申し出とはいえ、相手は碧眼の異邦人。当然、ミツコは周囲の大反対にあったことは想像に難くなかつ

た。それを跳ね除けて結婚しただけでなく、多くの庶民には鬼が住むと思われていた遠い異国へと連れ添って行ったのだから大したものだった。しかし、そんなミツコと『金色夜叉』の宮とがどこでどうつながるのか。胸中に蟠りつづけるこの疑念にいくら答えを出そうとしても出ないので、ついに海旭は訊ねた。「なにゆえ、戯作の女主人公とご令室とを比べられるのか？」

哲人伯爵はまたぞろ助け舟を出した。「どうもわが妻と同僚らしいのだ」

しかし、海旭には助け舟どころか謎かけになるばかりで、「同僚？」と鸚鵡返しにつぶやいてしばし思案した。ミツコと宮が同僚？でも、いったい、どこで、どんな同僚だったのか？ たしか宮のモデルは…？ 海旭の困惑を察して、伯爵はもう一艘の助け舟を出した。

「妻自身の話だと、物語のモデルと一緒に仕事をしていたらしいのだ」

これedyouやく海旭の中で謎の断片が答えを求めてまあまりはじめた。

たしか宮については、俗流新聞などによると、尾崎紅葉が出入りしていた当代随一の高級和風料亭「紅葉館」の美人女中、中村須磨がモデルだといわれていた。いっぽうの哲人伯爵の妻となる青山ミツコはというと、これも俗流新聞などの情報によると、老舗骨董屋の娘で、店の前で伯爵の馬車が粗相をして困っているところをミツコが巧みに対処したのが二人のなれ初めとも、あるいはミツコが伯爵の勤務する公使館へ奉公に上がってここで見初められたとも伝えられていたが、ひよっとすると二人が出会ったのは…と思案をめぐらせた果てに、海旭はおそろおそろ訊ねた。

「つまり、ご令室は紅葉館で働いておられたのですか…」
「いかにも」と伯爵は満足げに大きくうなずいた。

海旭は「やっぱり」というより、「まさか」という意外感に驚かされた。老舗商家の箱入り娘が高級料亭で客の接待をするとは、紅灯の世界に縁のない海旭には思いもよらなかったからだ。

そうか、そうだったのか。これですべてがつながった。ようやく得心がいつてまともようとする海旭をよそに、哲人伯爵がひとりごちた。

「踊りがなんとも可憐で…」

哲人伯爵の表情がにわかに若返ったように見えた。海旭は知りようもなかったが、このとき哲人伯爵の脳裏にはミツコと初めて出会ったときの情景が甦っていた。

ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギ―伯が公使代理として来日して一週間もせぬうちに、日本政府からの接待攻めが始まった。夜な夜な招待という名の強制連行にあった先は、日本が「西欧の窓」だと自画自賛する鹿鳴館であった。フロックコートフロックコートの男と腰を縛

り上げたバツフルドレスの女が互いの足を踏
みつけて顔をしかめながら踊るさまは、およ
そ舞踏会とはいえぬ代物で、ウイーンの社交
界で鳴らした哲人伯爵には、西欧の猿真似で
しかなく、日本にあがれてやってきた伯爵
には大いなる興ざめであった。そんなとき友
人の某国公使にぐちをこぼしたところ紹介さ
れたのが紅葉館だった。古雅にして優美、こ
れぞ憧れていた日本とばかり、哲人伯爵はた
ちどころに気に入って、入り浸るようになった。
もっとも魅きつけられたのは、「新柳二
橋の一粒より絹ごしにしても得難き美姫」と
いわれた館付き女中の美貌よりも、彼女たち
が余興として見せる手踊りであった。

その華麗・可憐ぶりは、「風俗画報」もこ
う絶賛してやまなかった。

「五十余人の美姫をかかえおき、客来とあれ
ば花のごとく着かざらせて座敷にならべ、そ
の服装もわざと御守殿づくりにして、縮緬の

小袖に紅葉の裾模様、帯の織り出しは白茶地
に色紙短冊を乱して、紅葉の秀歌秀句を書き
たり。絹足袋のすり足、目八分の通い、給仕
は三指にて厳かなるこというべからず。(略)
舞曲の数も多かるなかに、わけて名だたるは
紅葉の踊りなるべし」

ここで伯爵の愛妻ミツコの名誉のために記
しておくが、「館付き女中」といつても下働
きではなく、ましてや歓楽目的の芸妓でもな
い。家柄も十分に考慮された上で選ばれた子
女たちに対して、大人の女性としての作法か
ら、茶道・花道、歌舞音曲が厳しく仕込まれ
るので、良家から志願者が相次いだ。明治の
前半までは女子養成の学校がまだ整っていな
かったため、紅葉館は、江戸時代から娘を武
家に奉公にあげるのと同じく、花嫁学校的な
役割も担っていたのである。

このように紅葉館は「妻にしたい女性」の
宝庫でもあったので、玉の輿の乗って華麗な
る富豪の令室におさまる例は枚挙にいとまが

なかった。中には外国人に見初められる女中たちもいて、そのもっとも幸福な事例がオーストリア・ハンガリー帝国代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と紅葉館付き女中・青山光子だったのである。

哲人伯爵と海旭をつなげる奇縁

哲人伯爵がミツコとのなれ初めの回想にひたっている間、海旭は海旭で、途中で引き返した博文館の小僧時代と『金色夜叉』にまつわる回想に没入した。ひよっとすると紅葉館という場を介して、自分とこの碧眼の哲人とはつながっているかもしれない。どうやら二人の奇縁がここで重なりそうな、そんな予感に

海旭はとらわれた。

やがて哲人伯爵はミツコを見初めたときの回想からさめたらしく、海旭に言った。「ところでこの戯作は作者の醜聞をモデルにしたものらしいではないか」

海旭もあわてて、回想から我にかえると、一拍おいて答えた。

「それはちよつと正確ではありませんな」

たしかに女主人公のモデルはミツコの同僚である中村須磨に間違いはない、しかし男の主人公は作者の尾崎紅葉ではなく、尾崎が目をかけていた年下の小説家、巖谷小波であると、海旭は説明を切り出した。(つづく)

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話 (03) 384211289

振替 001800245231

江戸を歩く

第四十八回



神田上水関口から
護国寺へ

森清鑑

大江戸ウォーカー

音羽大通り

神田上水を渡ると広い道が北に一直線。これが音羽町大通りで、道の左右は音羽町の家並みが連綿と続く。上水に接しているのが音羽町九丁目。護国寺に向かうに従い、町の番号は若くなる。町は全て護国寺領である。いかに幕府が計画的に町造りを行ったかがわかる。江戸における都市計画の典型である。上水から北に最初に横切る区画道を左に行けば目白坂を登り、目白不動に出る。これを含めて九本の区画道が大通りを横切る。したがって寺領町は大道の左右に升目に区画され、整然と並んでいる。

民家、商家が建ち並び、水茶屋、料理屋が軒を連ねる。江戸でも有数の繁華街になった。音羽大通りをひとつ奥に入った路地にはご多分にもれず岡場所が出現。特に神田上水に近い九丁目から六丁目に集中し、音羽の岡場所といえは江戸では誰しも知る存在。岡場所の



◆散歩図 神田上水関口から護国寺へ

岡は外、局外の意味でこれは天下の公娼地吉原に対して使われていた言葉。上水沿いに還国寺という寺があるがそこから上水へ下る崖の下には私娼宿がたむろする有様であった。なにしろ護国寺領であるから、見かねた大岡越前守が取り締まり強化に踏み切ったほどである。

八丁目から六丁目の東方一帯は御賭方の大縄地。大縄地とは役目を同じくする役人が集合的に住まいする場所のことをいう。五丁目から三丁目にかけては寺社奉行安藤長門守（福島）の五万坪に及ぶ下屋敷が広がっている。

護国寺

ここを過ぎると、まもなく一丁目。護国寺の門前に直接ぶつかる。護国寺の門前には火除け地としてことさら広い「広道」が東西に広がっている。道と云うより広場である。大勢の人々が行き交っている。大通りの正面に

仁王門。潜ると右側に歓喜院、左に普門院。参道から階段を登るとまた広場があり、さらに段々を上ると広い境内に出る。そして中央に観音堂（本堂）がでんと控えている。護国寺は五代將軍綱吉が生母桂昌院の祈禱寺として建立。したがって音羽大通りは参詣する際の將軍御成道であった。桂昌院は亡くなるまでに三十回以上、綱吉は二十回近くこの寺に参詣している。

護持院

江戸後期、広大な寺領の西半分が護国寺で東半分が護持院になっている。丁度、全寺領の半分に境界線が引かれていた。護持院も綱吉が將軍家祈願のために神田橋外に起こした



◆江戸名所図絵 護国寺 下、広道。右下、仁王門。左上、本堂。右上、長い柵から右一帯が護持院。

巨刹でその堂塔は上野寛永寺と並び称されるほどであった。しかし、享保年間に火災で消失し、以後護国寺のとなりに移転した。元の場所^所は外堀の神田橋御門から雉子橋に至る広大な寺領で、移転後明地^{あきち}となり、二番原、三番原、四番原と広大な芝生のまま残された。夏秋には民衆に解放され、人々はここを「護持院ヶ原」と呼び、憩いの場所とした。また、冬春には、しばしば將軍が鷹狩りを行ったところでもある。江戸城のそばにある一等地の自然。夜ともなれば寂しい処。剣豪小説では、しばしば決闘の舞台となり、森鷗外の歴史小説「護持院原の仇討」はつとに有名である。護国寺仁王門前の広場を右に行くと護持院の惣門がある。入ると左に池があり、橋を渡ると中門、潜った先は広大な境内。豪華な方丈、護摩堂が並んでいた。明治になると社殿を除く、大半の広大な寺領は宮内庁管轄の豊島ヶ岡御陵に変わった。護持院は廃院にされ、護国寺に統合されることになる。

御鷹部屋

護国寺領の西面は雑司ヶ谷村の畑に隣接する。広大な田圃^{たんぼ}をくねる畦道を西に歩むと九千坪の広い土地に御鷹部屋がある。これは吉宗が鷹狩りや軍事訓練の場として設けたところで、御鷹部屋には鷹匠頭をはじめ、目付、同心が常時七、八十名詰めていた。この御鷹部屋の全敷地と雑司ヶ谷村の一部が今日の雑司ヶ谷霊園となった。雑司ヶ谷霊園にはジョン万次郎、夏目漱石以下多くの著名人が眠っている。

鬼子母神

御鷹部屋からの畦道をさらに西に歩けば江戸つ子が愛した鬼子母神^{きしもんじん}がある。当



◆江戸名所図絵 鬼子母神

端境道を北に行くと、やがて綱干坂^{あみほしざか}。この坂を登り切ると右側に広大な御薬園が広がる。綱干坂を登らずに右へ曲がる一本道をしばし歩くと再び北に登る道に出る。ここを歩く。すると今度は鍋割坂。坂を越えると御薬園の東側に出る。この道沿い右側に、小石川施薬院、養生所、それに御薬園奉行、岡田利左衛門の家宅があった。江戸時代大勢の貧民患者がこの小石川養生所に通い、鍋割坂は別名「病人坂」と云われるほどであった。今日、この坂は拡張された小石川植物園内に取り込まれ、先ほどの横一本道から北側はすべて植物園となっている。

御薬園ができる前には、この辺り一面、通称「白山御殿^{はくざい}」と呼ばれる広大な屋敷があった。五代将軍、綱吉が将軍になるまでを過ごした処である。御殿の周囲には堀が巡らされ、隅槽まであったというから本格的な砦のような屋敷であった。彼が将軍になると、この屋敷は取り壊され、その跡地が御薬園となり、

園内に小石川養生所もできて幕末を迎えることになる。御薬園では、青木昆陽がサツマイモの試験栽培を行っている。これもまた、将軍吉宗―奉行大岡忠相のコンビで飢饉に備えて着手された業績である。この辺りは、また「初音^{はつね}の里」とも呼ばれていた。江戸で最初にホトトギスの鳴き声が聞こえる処と云う意味からこう呼ばれていたのである。

小石川養生所

小石川養生所は一介の町医者、小川笙船^{しょうせん}が八代吉宗の目安箱に「庶民救済の療養所を造るべき」と提案した事に始まる。吉宗はこれを読むと早速、大岡越前を呼び、検討に入った。翌月、大岡忠相は笙船を評定所と呼ぶ。笙船は構想を聞かれる。そこで彼は、身寄りのない病人を保護する施薬院の設置、幕府医師が交代で治療に当たること、看護人は身寄りのない老人に務めさせること…などを提案。忠相は吉宗の了解を得る。こうして享保

七年（一七二二）十二月にできたいわば最初の国立療養機関が小石川養生所である。建物は長屋風で収容人数は四十名。薬膳所二カ所、医師は本道（内科）のみで七名が担当。ここでは身分を問わず診療が受けられる。特に貧窮者の受け入れを重視した。入所者は治療費、食費、雑費一切無料。特に看病人のいない貧窮者、看病人がいても貧窮の病人ならばたとえ行き倒れの人でも収容した。

こうして養生所はできたが、はじめの頃、患者が全くやってこない。なぜだろう。大岡忠相はその原因を調べ始める。すると、庶民が幕府御薬園の薬草実験にされると誤解し、躊躇していることがわかった。そこで彼は江戸中の町名主に声をかけ、養生所に見学にくるように呼びかける。さあ、実態が分かれると患者は急激に増えた。笙船先生の奮闘が始まる。その活躍ぶりは、山本周五郎原作の「赤ひげ診療譚」やこれを映画化した黒澤明の「赤ひげ」で克明に描かれている。彼は、文

字通り、赤ひげ先生と呼ばれ、庶民に親しまれた。以後、代々、笙船の子孫が肝煎（責任者のこと）となってこの事業を引き継ぐことになる。医師の数もさらに増え、初めは幕府医師の家柄の者が多かったが後年、町医者も参加するようになった。養生所に今も残る井戸跡。この井戸の水量は豊富で水質も非常に良かった。関東大震災では多くの命を救っている。

御薬水

御薬園、小石川養生所の北側は御家人の住宅が密集している。これも白山御殿の名残である。南に行こう。再び鍋割坂を下る。御薬園に隣接する東側は松平駿河守（愛媛）の下屋敷（大名の別邸一万六千坪）で、その南沿いの道を東に歩き、屋敷の途中で南に折れ下ると宗慶寺門前町にぶつかる。宗慶寺がでるはるか前に、浄土宗中興の祖、了誉聖因（一四一五）この地に庵を開

いた。その庵の傍らに清泉があった。これを彼はきつと法然上人の遺跡にちなむ吉水よしみづとはこのようなものに相違ないと崇めた。了誉聖岡の庵は無量山寿経寺といわれた。それから約二百年経って、家康の母、於大おほのの方が没するとこの寿経寺を菩提寺にするよう増上寺からの薦めがあり、家康もそれを決意した。しかし、なにぶん境内が小さいため、近くに移し、新たに於大の方に相応しい広大な一寺を開創することにした。それが小石川伝通院である。したがって正しくは、無量山 伝通院寿経寺という。後に、家康の側室、茶阿局が剃髪し、宗慶尼と称し、寿経寺跡地に隠棲、ここで没した。そして、彼女の法名から宗慶寺が誕生する。だが、了誉聖岡以来の御薬水は変わらず残っている。この吉水の井戸から出る水を「極楽水ごくらくすい」と人々は呼び、崇めるようになった。よほど良い水だったのであろう。江戸の名水、極楽水の噂は広がり、ついには付近一帯の地名として定着していったのである。

る。江戸末期、宗慶寺山門の右手に極楽水の井戸が描かれている。

そうしたわけで、この辺りには伝通院の領地が点在している。そしてすぐ南に広大な伝通院境内がひろがる。宗慶寺から、もとの道に戻って御薬園に続く松平駿河守下屋敷沿いに歩く。現在も小石川植物園南沿いを通る同じ道。屋敷の東縁に沿って北に登ると御殿坂である。その名も白山御殿の名残で、この坂を登っていけば白山の五叉路に出る。御殿坂を登らずに直進する。道は急に南に下がる。

すると左側に祥雲寺がある。さらに南に無量院（浄土宗）の境内が広がる。この辺り、小石川村の広々とした田野に木々が立ち並び、美しくも平板な光景である。



◆江戸名所図絵 宗慶寺極楽水。左下山門を潜って右手にある、屋根に覆われている極楽水の井戸。

祥雲寺

祥雲寺（曹洞宗、明治末期に池袋に移転）には山田浅右衛門代々の墓がある。意外なことに山田家の身分は武士ではなく、一介の浪人とされている。浅右衛門家は、代々、云わずと知れた斬首刑の執行役を果たしてきた特異な家系である。首の皮一枚を残して斬首する。これは並の腕では到底できることではない。代々の浅右衛門が、その高度な技を持っていたがために正規の首切り役人から実際の斬首刑の依頼を受けるようになり、次第に斬首刑専門職としての地位を確立していった、という希有な家系である。通称「首切り浅右衛門」。実はこの山田家、本業は「公儀御試御用」。武家の刀の切れ味を確かめる「試し切り」という厳粛な儀式を業としていた。そのために実際の死罪人の死体を使った、浅右衛門の刀の鑑定は絶大な信頼があった。しかし、斬首や御試御用から得る収入はそうたい

したのではない。ところが浅右衛門家は裕福であつたという。それは死罪人の内蔵から薬を作り、それが不治の病の労咳に効くということで大きな利益を上げたという。しかし、歴代浅右衛門の偉いところはそうして得た利益を、死罪人を弔うために惜しげもなく注ぎ込んだことにある。命日にはあちこちの寺で欠かさず慰霊を行い、祥雲寺には大きな慰霊碑を建立し、罪人の霊を弔った。さらに死罪人は、斬首刑の直前に辞世の句を残す。その句を理解するために俳諧を学ぶようになり、結果、歴代の浅右衛門が俳人の称号を持つにいたる。浅右衛門家が斬首した罪人の数は二千数百人に及ぶ。主に小塚原刑場を担当し、江戸末期では安政の大獄で吉田松陰、橋本左内など、明治になってからは、大久保利通を暗殺した島田一郎、高橋お伝。そして明治十四年の斬首刑廃止とともにその役目を終える。現代、多くの作家が浅右衛門を主人公とする作品を描いている。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●紀

〔特選〕海風のそよぐ紀の国蜜柑椀ぐ

井村善也

紀州といえば紀国屋文左衛門を持ち出すまでもなく、温州が主流となるまでは、江戸時代から大いに好まれた蜜柑である。山の斜面にはたわわに実った蜜柑が、日をいっぱいに受けている。海風が心地よい。

〔佳作〕半世紀過ぎし父の忌曼珠沙華

佐藤雅子

街はいまシユラ紀の匂い夏果てぬ

井口 栞

紀州路のすこしの冷えにココア欲る

増田信子

●行

〔特選〕行幸の笑顔親しや菊日和

石原 新

昭和天皇の後半生は人間天皇として、国民に親しまれるように努めて来られたと思うのだが、それでも威厳は残っておられた。今の

天皇にそれはない。「笑顔親しや」である。
それにしても「行幸」とは久々の語だ。

〈佳作〉よく似合う僧の顎髭遊行の忌

佐藤雅子

秋暑し跛行の犬と橋渡る

内藤隼人

行き当たる物を登りて毛虫這う

山口信子

●自由題

〈特選〉病葉やただまつすぐな街の川

長谷川 裕

道も川も、もともとはくねくねと曲がって
いるものだった。それが殊に都会では真っ直
ぐに整えられ、コンクリートで形が造られて
しまう。この句では「わくら葉」と「ただ」
が、作者の思いを浮かび上がらせている。

〈佳作〉秋茜群れて日暮れの無人駅

森 懐人

石投げる少年一人秋の浜

浜口佳春

新そばに誘い込まれて昼の酒

中村真一



誌上句会〈編集部選〉

■紀

紀年日は十六夜の月蔦紅葉
無花果の中のカンブリア紀の舌
白亜紀の無花果紫の化膿
紀州から二百十日の便りあり
蠅帳の中の紀文の鳴門巻
二十一世紀の婆さんとして芋つつく
梨の地球梨の世紀を思うべし
じつと覗く蟬の穴から記紀歌謡
紅葉かつ散るふるさとの紀氏遺跡
京の秋俳誌に送る紀行文

當間あさ子
小林苑を
三宅月彦
山内桃児
齊田 仁
笠井亞子
遠藤ゆかり
長谷川裕
内藤隼人
浜口佳春

■行

雁行に絆は深き稲黄金
肩々の熊手行き交う西の市
行く水を皎と照らして冬の月
帆を張れば秋の空行く雲となり
秋天に母が歌いし討匪行
水死人二人晩夏の河蛇行
新蕎麦を食う行間を読む如く
行僧の作務衣干しある坊の秋
晩秋の夜行列車のような通夜

■自由題

亡き母に詫びたきことや貴舟菊
山形は被災に合わず今年米
浄土誌に名遣し吉田絃二郎
秋が来る競歩の人のように来る
蟬時雨右や左の午後三時
草叢に滝の元栓ひとつあり
ナポリタン色の空なり秋はじまる
ばた餅のようだこのあたりの残暑
塔見えてこれより秋と思いけり
杉の巨樹雨八方へ山麓へ
どの石も仏に見えて秋の蟬
谷底へ影落としいる秋日傘

當間あさ子

森 懐人

井口 栗

三宅月彦

山内桃児

齊田 仁

千草忠弘

仙道利通

甘利麻衣子

當間あさ子

佐藤雅子

飯島英徳

内藤隼人

井口吾郎

齊田 仁

安藤明美

西原規夫

三宅月彦

小林暢夫

岡本英子

坂倉一光

浄土誌上句会の お知らせ

兼題

食器 楽器

自由題

締切・二〇二二年十二月二十日

発表・『浄土』二〇二三年一・三月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

編集後記

八雲たつ出雲の国の稲穂かな 岱潤

早十二月、今年も最終月を迎える。

今更のことだが、今年は『古事記』が編集され元明天皇に献上されてから一三〇〇年目に当たる。そこで『古事記』にまつわる様々な本が出版され、上野の博物館では「出雲展」が行われていた。そんなこともあり先月我が寺の団参も、出雲に行ってきた。

『古事記』を学習して、その舞台の四割強が出雲だったということを初めて知った。そして『日本書紀』が国際的、社会的な天皇家の正史であるのに対して、『古事記』はちょっと違い天皇家の中の

内乱や、滅び行く者たちへのやさしい視線を感じることが出来る。

後のオオクニヌシはスサノヲの子供ながら、様々な迫害や殺害行為に合っても復活し、国ツ神として出雲を見事な瑞穂の国に作り上げた。これを見たアマテラスが自分たちが支配すべき土地であるなどと宣言して遠征軍を送り、オオクニヌシに国譲りを承諾させた後に、孫のニニギを降臨させ、その子孫である神武天皇が誕生するという上巻の物語は、支配者側が作ったとは思えない不思議さがある。オオクニヌシは、国譲りの代償に、天まで届く立派な宮殿を造らせ、永遠に自分たちを祀らせる。それが高さ四八メートルは

あったと思われる出雲大社だ。現在では復元の模型でしか見れないのが残念だ。国土を譲る譲らないという話を、一滴の血も流さずに進めたオオクニヌシの態度を誇らしく思う。(長)

編集スタッフ 長谷川岱潤 斎藤晃道 佐山哲郎 青木照憲 村田洋一

浄土 七十八巻十二月号 頒価六百円 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十四年十一月二十日

発行 平成二十四年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティイ

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・〇三六

振替 〇一八・〇八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



美味探訪

懷石 川端 銀座

東京・銀座通り八丁目のソワレドビルの2階に上がると、都会の喧騒が嘘のような佇まい。『川端』が迎えてくれます。

玄関先、蹲と露地の風情が漂うなか進むと、店内はカウンター席、テーブル席、掘りごたつの部屋と用途にあわせて使いやすく、部屋ごとの軸、花、香が四季を表現して、それはまさに料亭の趣。なのに敷居の高さを感じさせません。大女将自ら活ける花は、花と大女将の命が一緒になっているようでハッとさせられます。

料理は、栗原料理長が旬の食材を生かし、シンプルな素材を引き出す「だし」へのこだわり、そして繊細な包丁遣いにいつも感動。また、メに若女将が心いれて点てる抹茶の美しさ。接客の素晴らしさ。いかにお客の身になって考えていることが伺えます。この雰囲気ですらランチが4200円〜と良心的。今風にいうとコスバ拔群と云うのでしょうか。再訪しない訳がありません。

今年も残りわずか、一年の流れのはやさに驚きながらも、新しい年の訪れの節目の準備を大切にしてきた日本料理の『おせち』。少し贅沢な料亭の『おせち』を一緒に紹介いたします。

2段 34,650円

3段 56,700円 12月15日までに予約。全国発送しています。



東京都中央区銀座8-8-7 ソワレドビル2F 03-3572-4050

営業時間 ランチ 11:30~14:30

ディナー17:30~22:30 (月~金)、17:00~22:00 (土・祝)

定休日 日曜日

料理 ランチ 4200円〜、ディナー 12000円〜

土・祝日の夜はランチの料金有

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう

600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より